

359 当科における手術不能非小細胞肺癌の多剤併用化学療法奏効例の検討

近畿大学医学部第4内科

○杉原錬三，東田有智，村木正人，原口龍太，保川 淳，田中 明，中野直子，波津龍平，藤田悦生，久保裕一，上西豊基，津谷泰夫，中島重徳

【目的】非小細胞肺癌の治療は手術が第一選択となっているが，手術不能例に対してはCDDPを含む多剤併用療法が主体となっている。今回我々は当科において手術不能例に対して多剤併用療法を施行した症例のうち，奏効が得られた症例について検討したので報告する。

【対象】対象は昭和59年以降当科において多剤併用化学療法を施行した手術不能非小細胞肺癌のうちCR4例，PR25例で，男性22例，女性7例で，年齢は43才から78才，平均年齢は62.8才であった。組織型は扁平上皮癌18例，腺癌11例で，病期分類はI期1例，Ⅲa期10例，Ⅲb期1例，Ⅳ期17例であった。化学療法は，昭和59年前半はBLM+MMC療，60年前半まではCDDP+PLM+MMCとCPA+ADM+CDDPの交代療法，以後はCDDP+VDS+MMC療法を施行し，一部の症例には免疫療法，放射線療法及び局所療法を施行した。

【結果】PR以上の群では，年齢，性，病期分類に特徴的なものはなかったが，個体側の因子では，PSが低く，腫瘍径が小さく，扁平上皮癌が多く，NSEが高い傾向にあった。また，化学療法後には奏効期間が短く，平均生存期間が長い傾向にあった。以上より今後は短期間に多量の抗癌剤を投与する必要性があり，G-CSF等の補助療法が必要と考えられた。

361 臨床試験でのTime to progressionの意義 国立がんセンター内科

○中川和彦，新海哲，田村友秀，江口研二，佐々木康綱，大江裕一郎，山田耕三，森田正重，福田正明，児島章，井口清吾，西條長宏

治療開始日より腫瘍増悪期までの期間、Time to pogrsson (TTP)の臨床的意義については一定した見解は得られていない。非小細胞肺癌患者を対象としたMVP (MMC+VDS+CDDP) versus VP (VDS+CDDP) の randomized trial に entry された124例を対象としてTTPの臨床的意義について検討した。124例は、全例初回治療例であり、腎、肝機能障害等重篤な合併症の無い、PS 0-2の症例であった。124例中、死亡例74例についてはSurvival time (ST) とTTPの間に強い正の相関が認められた($R=0.599$, $p=0.0001$)。PR群(20)、NC群(25)、PD群(26) 個別の解析では、PR群およびNC群でSTとTTPとの間に有意の相関を認めたが($p=0.0167$, 0.0188)、PD群では相関しなかった($p=0.1061$)。生存例を含めたPR群35例とNC群45例におけるMSTは429日、434日と差を認めなかったが、TTPのmedianは183日、139日と有意の差を認めた($p=0.016$)。TTPはSTと高い相関を有するもSTを直接的に表現しているものではないと思われる。非小細胞肺癌患者に対する他の臨床試験、及び小細胞肺癌患者における分析の結果と合わせて報告したい。

360 切除不能非小細胞肺癌における初回化学療法NC群の治療継続の意義

近畿大学第4内科

○原口龍太，東田有智，上西豊基，大川健太郎，久保裕一，杉原錬三，山本 淳，中野直子，村木正人，桜田隆一，津谷泰夫，中島重徳

近年肺癌における化学療法の進歩は著しく多くの肺癌縮小効果が報告されている。しかし非小細胞肺癌の化学療法で有意に生存期間を延ばし得る事を証明した報告はない。特に化学療法施行後の判定にてNCとなった症例に関し治療継続の意義が問題となる。今回我々は過去5年間に当科入院した手術不能非小細胞肺癌で化学療法がなされその判定でNCであった症例に関し治療継続の意義を検討した。

対象：手術不能非小細胞肺癌93例のうち1回目の判定でNCであった48例(男性35例，女性13例，Sq18例，Ad28例，その他2例，年齢38才~78才平均63才)であった。

方法：一回目の判定後化学療法非継続群13例(CVM6例，PPM4例，EP1例，CAP1例，COMP1例)，化学療法継続群31例(CVM×2以上15例，CVM+他9例，PPM+CAP4例，PPM+他3例)，放射線療法のみ追加群4例(CVM後3例，PPM後1例)の平均生存日数を比較した。

結果：化学療法非継続群では平均生存日数は90日，化学療法継続群では265日，放射線療法のみ追加群では165日であった。

以上より化学療法による継続治療により生存日数を延長しうることが示唆された。今後症例をふやし，さらに検討中である。

362 肺癌の組織型からみたCAV療法 (cisplatin, adriamycin, vindesine) の有効例・無効例の検討

浜松医科大学第2内科¹，同第1病理²

○志知 泉¹，佐藤篤彦¹，須田隆文¹，安田和雅¹，岩田政敏¹，秋山仁一郎¹，岡野昌彦¹，千田金吾¹，森田豊彦²

目的：非小細胞肺癌に対する化学療法はcisplatinの導入により奏効率の向上をみたが，未だ満足すべき結果は得られていないのが現状である。今回，我々はCAV療法の有効性と組織型・分化度，病期，レ線像，腫瘍マーカーとの関係について検討した。

対象：1985年以降，CAV療法を施行した非手術非小細胞肺癌症例を対象とした。男性16例，女性9例，計25例，治療開始時の年齢は59.0±2.1歳であった。

結果：対象症例の組織型・分化度及び病期は下表の通りであり，対象症例全体の奏効率は8例/25例(32%)であった。組織型では類表皮癌3例/6例(50%)に対し，腺癌は4例/18例(22%)，特に中分化以上では1例/11例(9%)と不良であった。また，Ⅳ期症例で奏効率は低下していた。

| | | | | |
|------|-----|------|-----------|------|
| 類表皮癌 | 低分化 | 0/1* | Stage Ⅲ A | 2/5* |
| | 中分化 | 3/5 | Ⅲ B | 4/9 |
| 腺 癌 | 低分化 | 2/6 | Ⅳ | 2/11 |
| | 中分化 | 1/10 | | |
| | 高分化 | 0/1 | | |
| | 不詳 | 1/1 | | |
| 大細胞癌 | | 1/1 | | |

* CAV 奏効症例数
対象症例数